

Doesn't go the way

we want it to.



Doesn't go the way we want it to.

後ろを振り返ると、太陽が山に隠れ始めていた。ただひたすらに歩き続け、見ず知らずの町に辿り着いた。さりげなく立ててある木の看板には「オクタール」と書かれている。この地名について頭に検索をかけたが、何も出てこなかった。とりあえず町の様子を見て回ろうとしたが、見渡す限り家、家、家……。それもほとんどが二階建ての木造民家だ。少々歩いてもみたが、町もそれほど大きくないらしい。適当に見て回る限り、店らしい店は一軒もなかった。どうしよう、もう時期日が暮れる。僕には泊まる場所もなければ、お金もほんの少ししかない。こんなことなら……。と、思いかけて止めた。いまさら後悔はできなかった。しばらく途方に暮れていると、ようやく町の人に遭遇した。

「あの、すみません。この辺に宿はないですか？ できれば安いとこだと良いのですが、」

「ああ、安いかどうかは分からないけれど、町の端っこに一軒だけ宿があったはずよ。案内してあげようか？」

僕は通りがかりのおばさんの親切に甘えて、その宿まで案内してもらうことにした。

「その歳で一人旅？ 随分しっかりしてるのね。うちの子はきっと無理ね」

「あ、いや……。、」

そういうわけじゃないんです。と、言いかけたところでおばさんの一人語りが始まった。どうやら息子さんが一人いるらしく、未だにきちんとした職業に就けていないらしい。「あなたは大丈夫そうね」と言われたが、僕にはその根拠が分からなかった。

「着いたわ。ここよ」

おばさんの視線の先を見ると、そこら辺の民家となんら変わりない建物が建っていた。

「ここ、ですか」

特にこれといった看板もなかった。本当にこれが宿なのか？

「じゃあ、私はこれで」

「あ、はい。ありがとうございました」

深々と頭を下げる。おばさんは手を振りながら元来た道に戻ろうとして、振り返った。

「そういえば、あなた名前なんて言うの？」

「ユトと言います」

「ユトくん。随分と珍しい名前ね。また、会えるといいわね」

「ええ、ぜひ。ではまた。本当にありがとうございました」

また頭を下げると、おばさんはにこやかに帰って行った。良い人だったなあ。自然と心が温かくなった。一瞬だけ、今までのことを忘れられそうな気がした。

昼下がりの午後。かろうじて顔を出している太陽の下、今日は珍しく近所の幼馴染と一緒にいた。もうお互い上級学校に通ってからは性別の違いもあり、下級学校時代ほど会わなくなった。あの頃は何も考えなくてもすぐに話題が出てきたのに、今となっては何を話したらいいのか分から

ない。無言の時間が続いた。

「……明日、試験だね。勉強した？」

「いや、なんも。イレーヌは？」

「相変わらずね。私は一応したよ。二時間くらい……」

「そっか」

学校から家まではそう遠くなかった。が、今日だけはいくら歩いても着かない。石畳の道はまだまだ続く。どうにかしてこの気まずい雰囲気を開きようと、彼女の興味があったものを必死に思い出す。絵や花は僕が分からないし、服なんかもっと分からない。僕たちの影はだんだんと薄くなって、空から太陽が消えた。

「私たち、昔からこうだっけ？」

イレーヌは後ろで手を組んでさっきまであった影の方を見ていた。

「いや、違うよ。前はもっと話が弾んでた気がする」

「そうよね。どうして前みたいに接することができないのかな？　なんか、」

「なんか？」

彼女の方を僕が見ると、彼女もこちらを向いた。

「つまらないよね」

僕は止まった。彼女は歩き続けた後、走って先の角を曲がった。

その日、太陽が再び顔を出すことはなかった。

日はすっかり落ちていた。民家の明かりもだんだんと点き始めている。僕は目の前の宿をもう一度見た。やっぱり看板はないし、作りも二階建ての木造住宅。始めの頃は宿にするつもりはなかったのだから分りづらくとも仕方がないかと思えたが、せめて看板くらいは立てろよと思ったのも事実である。とりあえず心を決め、カフェの入り口のようなドアの取っ手に手を掛ける。カランと鈴の音が鳴って、奥から人が出てきた。

「いらっしゃいませ。こんばんは。お一人ですか？」

宿の主人らしき人は意外にも若い男だった。ぱっと見、三十代前半といったところか。建物の内装は外観とは違い、フロントもあれば、小さいがソファのある待合所もあり、宿らしかった。

「はい……。って、その前に料金を聞いてもいいですか？」

「ああ、すみませんね。外に看板も何も出してなくて。実のところ料金は決まっていません。ですが、安心してください。こんな宿ですから、高額な料金を請求することはいたしません。いかがいたしますか？」

かなり不安ではあったが、ここ以外に泊まる場所がありそうな気はしなかった。さて、どうしようか。

「せめて検討くらいはつけていただけませんか？」

「そんなにお金が心配ですか。なんだったら無料で泊まっていってくださっても構いませんよ。あ、別に何か裏があるわけでもないの。決めるのはお客様自身なので、やめてもらっても結構ですし……」

宿主は淡々とした口調で喋っているものの、表情は常にこやかだった。

「決めました。泊めさせてください。お金はあまりありませんが、ちゃんと払います」

「ありがとうございます。では、こちらへ」

フロントと待合所の間を抜け、その先にある階段へ案内された。階段は思ったより広く、人が横三列に並んで歩けるくらいだ。こういうところを見ると、宿らしいなと思う。二階に着くと真っ暗な廊下のわきにいくつかの扉があるようだった。しばらく辺りを観察していると、「こちらです」という宿主の声が聞こえ、慌てて宿主の後を付けて行く。それからすぐに宿主は一つの扉の前で歩みを止めた。

「どうぞ、お入りください」

扉を開けた状態で確認できるのは、そこそこ広い部屋の真ん中にベッドが一つあるということだけだった。どうやら洗面所もバスルームもトイレも共同となっているようだ。僕は促されるままに中に入った。

「では、ごゆっくりおくつろぎください。何かありましたら何なりとフロントへお申し付けください。私はこれで……」

役目を終えた宿主はこの部屋の扉を丁寧に閉め、戻っていった。

プライベートな空間がきた途端、どっと疲れが押し寄せてきた。とりあえず電気はないのかと部屋中を隅々まで見て回ったが、見当たらなかった。そういえば廊下の電気も点いていなかったな。不思議に思い、荷物を置いて廊下に出た。今日は丁度新月らしく月明かりすらない。だが、そのうちに目も慣れてきたのかそれなりに遠くまで見渡せるようになった。廊下はもっと先まで続いているようで、いくつかの扉も見受けられる。誰かが泊まっている可能性もあるため、開けようとは思わないが少し気になった。足元に気を付けつつ、ゆっくりと奥へ進む。床をよく見ると意外にも高級そうな真っ赤な絨毯が敷かれていた。いよいよ先の扉まで来たところで絨毯が途切れていた。サイズを確かめなかったのか、あるいは別の場所に敷いていたものをここに敷いたのか。どちらにせよここがこの宿の安いところなんだと思い、もっと先へ進もうとした。

「お客様、」

後ろからの声に思わず振り返ると、先ほど去っていった宿主が無表情で立っていた。

「こちらから先は立ち入りをご遠慮ください」

「なぜですか？ 何か見られたくないものでも？」

「実は、私の寝室になっておりました……」

「え。そうだったんですか。すみませんでした」

自分の部屋に戻る途中、一度だけ後ろを振り返ると宿主が先程と同じように佇んでいた。

どう考えても不可解だ。それゆえに好奇心と恐怖心が混じり合う。とりあえずこの夜は大人しく寝て、明日の早朝に少しだけ宿主の部屋を覗いてみよう。僕は夕食も取ることなく部屋の中心にぽつんと置かれたベッドに横たわった。

一日目の試験が終わった。まだ一日の半分も終わってないのに帰宅している。きっと日程的に午後からまた勉強しろということだと思うけど、僕には勉強なんてどうでも良かった。だから、今日の試験の出来ももちろん良くなかった。でもどうせ母さんは怒らないから。どうせ……。

「ユト！ 聞いてんのかよ」

「え？ ごめん、何だっけ？」

上級学校で仲良くなったフレンは、僕と正反対だけどころどころ似ている。フレンはまるで別世界に住んでいる人みたいだった。きっと向こうからしたら僕も同じなのだろうけど。

「今日これからどっか行こうぜって言ってんの。どうせお前勉強しないだろ」

「あ、うん。いいよ。僕は一旦荷物置きに帰るけど、どうする？」

「どうするも何も、俺が家に帰ったらもう出て来られなくなるの知ってるだろ？」

僕が笑うと、フレンに思いっきり叩かれてしまった。彼にとっては笑い事で済ませられるような話ではないのは分かっているが、同時にその気持ちは僕にとって理解しがたいものだった。

石畳の道から逸れるように角を曲がった。僕の家が目に入った。そして、二軒先の彼女の家も。あの日、忘れたい思い出が一つ刻まれた。と、今はそんなことを考えてる場合ではなかった。

「じゃあ、ここで待ってて。すぐ戻るから」

閉じられていた門を開ける。恐らく母さんはいるだろう。

「ただいま」

玄関に荷物を置いてまた出て行こうとしたとき、後ろから足音が近づいてきた。

「おかえり。あら、どこかに出かけるの？」

とにかく無言で出て行こうと扉を半分開けた。

「行ってらっしゃい」

僕は、静かに扉を閉めて母さんの方を振り返った。

「……………。どうして。母さん知ってるよね？ 僕が明日も試験だって。普通ならここで勉強は？ とか止めておきなさいとか言うもんだよ。どう考えてもおかしいでしょ。なんだよ行ってらっしゃいって。なんなんだよ！」

「ユト、もしかして学校で何かあったの？」

心配そうに僕の表情を窺う母さんがまた頭にきた。

「なんでそうなるの？ なんでいつもそうやって誤魔化すの？」

「誤魔化してなんかいないわ」

「嘘。じゃあ、なんで父さんがいなくなったの？ 教えてよ」

「それは……」

ほらそうだ。「父さん」って単語が出てくるといつも言葉を濁して、そして僕から目を逸らす。家族一人ひとりの中に秘密があっても構わない。言えないことがあっても構わない。けど、どうして父さんのことも秘密にするの？

玄関の壁を思いっきり叩いた。それでも母さんはまた僕を心配そうに見てるだけ。

「もういいよ」

僕は玄関に置いて行くはずだった荷物を持ち、飛び出した。僕の欲しかった声は聞こえなかった。今の表情はとてもフレンには見せられない。

「随分と遅かったじゃん。ホント待ちくたびれ……」

「ごめん、これから行かなきゃいけないところがあるんだ」

俯いたまま駆け出した先に当てはなかった。後ろから僕を止めるフレンの声が聞こえる。向かい風も強く吹き始めた。が、今の僕を静止させられる唯一のものはない。このままどこまでも走り続けられそうだった。どこも目指してない。視界は涙で遮られていた。

少しだけ目を開けると、窓から光が差し込んでいた。すぐには起きる気になれず、もう一度布団をかぶった。またすぐにでも寝られそう。そう思って再び寝付こうとしたとき、誰かが大きな足音を立てて階段から上がってくるのが分かった。そして、

「ユート！ いつまで寝てるの?!」

部屋の扉を思いっきり開け放ち、ずかずかと入って来たのは母さんだった。

「あーもう、うるさいなー……」

「何言ってるの！ 今日学校でしょ？ 早く支度なさい」

「え?! そうだっけか」

寝転がったまま部屋のカレンダーを確認すると、週終わりの二十三日に丸が付いていた。その丸を付けたのは昨日だから、今日は週始めの二十四日ということになる。僕は、飛び起きてすぐさま身支度をした。近くにあった時計を見ると、もう八時を回っていた。授業が始まるのは九時。なんだ、余裕じゃないか。ゆっくりと階段を下り、朝食をとるために一階のリビングへ向かった。テーブルにはすでにパンと目玉焼き、サラダが用意されていた。

「おはよう、ユート」

「おはよう、父さん。今日はいつもより遅いんじゃない？」

「ああ、ちょっとな」

なぜだろう。いつもとなんら変わらない日常会話にもものすごく違和感を覚えた。でも、それを特定することはできないから、きっと気のせいだろうと思った。そう自分に言い聞かせた。

「ごちそうさま」

「はい。そこにお弁当あるから忘れずに持って行くのよ」

キッチンわきの置いてある弁当を受け取り、忘れないよう玄関の靴箱の上に置いた。二階から教科書の入った鞆を持ってくると、ふいにインターホンが鳴った。ちょうど玄関を出ようと思っていたため僕が出た。

「おはようユート。もう準備はできた？」

扉の前に立っていたのはイレーヌだった。

「おは、よう……」

「あ、もしかして迷惑、だった？ だとしたらごめん。そうだよ、毎日毎日来られたら……」

「ち、違う違う！ 違うよ。そうじゃなくてさ、なんかイレーヌと久しぶりに会ったような気がして……」

自分でも何を言っているのか分からなかった。昨日も一緒に学校へ行ったはずなのに、僕は何を言っているんだ。恐るおそるイレーヌの表情を窺うと、意外にも穏やかな表情をしていた。

「あー、それたぶん髪形のせいかな。実は下級学校の頃の髪形に戻してみたの。よく気付いたわね。……ちよっと嬉しいかも」

よく見てみれば、いつもはただ下ろしていた彼女の長い髪が今日は後ろで上の方だけ髪飾りで結わえられていたのだ。

「やっぱり。よく似合ってるよ」

「うふふ、ありがと。じゃあ、そろそろ学校行こっか。このままだと遅刻ギリギリよ？」

僕は学生証に埋め込まれている時計を確認し、慌てて学校へ向かった。

「行ってきまーす！」

学校に着くと、クラスのほとんどが木製の長机にノートを広げて見返していた。窓際の空いている席に着いて、一限目の教科を確認すると、国史だった。そういえば復習試験だったっけ。…試験？ 何か引っかかる単語だが、今そんなことを考えている暇はなかった。朝の連絡事項も聞かずにひたすらノートを暗記する。こうして必死になっているといつも話しかけてくる奴が一人いるのに。そう思って横目でフレンの様子を見てみると、彼も必死になってノートを見ていた。

ついに一限目を知らせる鐘が鳴った。こういう日に限って先生は時間通りに教室に入って来た。先生は今日も真っ赤な服を着ていた。おまけにスカートまで真っ赤だった。

「はい、では授業を始めます。あー、そうそう。予定してた復習試験は、まだ学習していない範囲が含まれていたため、来週に回したいと思います」

その言葉に教室中が歓喜に沸いた。もしかしたら今日はついてるのかもしれない。

上気分のまま迎えた昼休みはいつも通りフレンと過ごしている。開いていた窓から風が入って来た。雨の匂いがする。ふと窓の外を眺めていると、だんだんと雲行きが怪しくなっていくのが分かった。

「なあ、フレン。今日って雨予報だっけ？」

「いや、曇りだったような。それにしても外暗くなってきたよな。こりゃー雨来るぞ」

学校から家はそう遠くはないが、やはり傘がないと少々辛い。授業が終わるまでに何とか上がってほしいと思いつつ、ぽつぽつと降ってきた雨を見つめていた。

そういえば今朝「試験」という単語がどうも頭の片隅に引っかかった。他にもいくつか引っかかることがある。普通の、いつも通りの生活をしているだけなのに妙に違和感を覚えるんだ。一体なぜなのだろう。

「ユート！ 聞いてんのか。もうそろそろ鐘鳴るぞ」

「え、ああ。ごめん。……って、前にもこんなやり取りしなかったっけ？」

「は？ そんな一つひとつの会話なんて覚えてねえよ」

確かに。でも、つい最近こんなやり取りをしたような気がした。……試、験？ 試験。そうか、試験だ。試験の真ただ中に遊ぼうと……。いや、僕は何を言っているんだ？ 試験の最中に遊んだら母さんに叱られるのがオチだ。また振り出しに戻ってしまった。

「なあ、ユート。お前今日変だぞ」

「僕も、そう思う……」

雨は強くなるばかりだった。

それから何日経っても違和感を解消することができなかった。むしろその違和感がなくなってきた。フレンもイレーヌも母さんも父さんもいつも通りだった。

今日はイレーヌと一緒に家へ向かっていた。彼女の歩調に合わせて石畳の道を進む。

「そういえば、明日ユートの誕生日よね？ 今年は期待しててよ」

目を輝かせてこちらを見つめるイレーヌに笑みを返した。端から見たら恋人に見えてもおかしくないように思えた。周囲に知り合いがいたら茶化されそうだ。念のため辺りを一周見回すと、見覚えのあるおばさんを見つけた。

「あ……。イレーヌ、先に帰っててくれるかな？ ごめん」

そう言っておばさんの元に駆け出した。確かこっちの角を曲がって行ったような。予想通りだった。おばさんは前を歩いていた。

「こんにちは。あの、お久しぶりです」

「あら！ 久しぶりね。また迷子にでもなったのかしら？」

迷子……？ 全く身に覚えがなかった。それよか僕はなぜこのおばさんを知っていると思ったんだ？

「あの、すみません。僕覚えていなくて。そのこと詳しく教えていただけませんか」

「それでいいのよ、ユトくん」

ユト……。脳内に漂っていたもやが突然一掃された。大量の情報を押し込まれたように頭が痛い。思わずその場にしゃがむと、おばさんの姿はもうなかった。そうだ！ 思い出した。僕はユートじゃなくてユトだ。それに僕は宿に泊まっていたはずだ。気付いたときどうして家に居たんだ？ どうして……。その他にも気付けばおかしいことだらけだった。

日が暮れ、辺りは暗くなってきていた。まずは急いで家に帰ることにした。どうやら父さんはもう帰っているようだった。とりあえず荷物を置こうと階段を上って自分の部屋に向かった。

「やあ。おかえり、僕」

部屋には僕よりも先に僕がいた。

「うわっ！ どうして僕がいるの?!」

「そりゃいるよ。だってもう気付いたんでしょ？ 自分の存在に。だったらどうして驚くの」

そうか。この僕はこっちの僕、ユートだ。

「ユート、ここは一体どこなの？」

「さあ。僕は答えられないよ。答えは人に教えてもらうものじゃないと思うけど。でも、君の中の矛盾を解消すればおのずと答えも見つかるんじゃない？」

その一言で僕はすぐさま父さんがいる一階のリビングに向かった。

「父さん！」

息も整わぬまま叫んだ。

「どうしているの？ どうしてこっちにはいるのに向こうにはいないの？」

父さんは驚いたようにこちらを見ている。もしかして質問の意図が分かっていないのか。

「ユート、お前の誕生日って明日だったよな」

「そうだけど、そうじゃなくて。どうして、」

言いかけた言葉は遮られた。

「よく聞きなさい。お前は明日で十八歳。つまり成人になる。その前までにここから戻らなければずっとこのまま、ここにいななければならないことになる」

驚いて何も言い返すことができなかった。だってもうリミットまであと六時間。

「どういうこと?！」

「父さんは、向こうの母さんと結婚してないんだ。結婚する直前にこっちに来た」

「どういうこと、なの。ねえ、さつきから全然話が噛み合っていないんだけど……」

「まあ、聞いていなさい。時間がないんだ。俺とお前の母さんは、俺の成人を待って結婚する約束だったんだ」

そう言って、父さんは続けた。

もう日付が変わりそうだった。俺の提案したプロジェクトが最終選考まで残ったのだ。ずっと前からの夢が叶うかもしれないチャンスだった。だが、このままいったら明後日まで帰れるかどうか……。明後日は俺の誕生日でもあり、婚姻届を出しに行く日でもあった。とにかくナリシャに電話を一本入れておこうと会社の公衆電話を借りた。

「……あ、ナリシャ？ ごめん、夜遅くに。実は今日帰れそうにないんだ。もしかしたら明日も、明後日も、いつ帰れるか分からない」

『え？ 何言ってるの？』

「だから、いつ帰れるか分からないって言ってるんだ。だから、婚姻届明後日でもいいかな」

『どうして？ あなたおかしいわ。そういう日はお仕事を休んででもこっちを優先させるものよ』

「ごめん、どうしても帰れないんだ。だから、」

『……分かったわ。じゃあ、もういいわよ。最低』

ナリシャは電話を切った。俺は乱暴に受話器を置いた。彼女の言動に苛立ちが募った。が、今はそれよりもプロジェクトの成功が最優先だった。もしこのプロジェクトが成功したらきっと彼女も機嫌を直してくれるだろう。そう思いつつ、仕事場に戻った。夢の実現まであともう少しだ

。だが翌日、俺は帰宅するにもできず、途方もなく彷徨っていた。結局、プロジェクトはあと一歩のところまで選ばれなかった。これではナリシヤに会わず顔がない。どうしようもなくとある町までやって来てしまったが、そろそろ泊まる場所を見つけなければならなかった。空を見上げると、圧倒的に群青色の面積が大きくなってきていた。このままでは野宿になってしまう。とにかく人を探そうと辺りをうろうろ歩き回ってはみたけれど、人の気配はなかった。仕方なく近くにあった一軒の木造民家を訪ねてみることにした。

「あの、すみません。この辺に宿はありませんか。値段は少々張っても構いませんので」
出てきたのは四十代くらいのおばさんだった。

「ああ、それならあそこの建物だよ。あの一軒家みたいな建物」

「あれですか。ありがとうございます」

一礼して、早足にその宿まで向かった。吹き付ける冷たい風が俺を一直線にその宿に向かわせた。

「それからその宿に泊まって眠りについた。だが、起きたらここに来ていた。ユート、お前もきつとこんな体験をしたはずだろうと思う」

その通りだった。一つ頷いて見せると、父さんは続けた。

「ここはな、お前にとっての理想の世界なんだ。こっちに来てからたくさん都合の良いことが起きただろう」

理想の世界。確かにイレーヌが昔のようになっていたり、フレンが無駄にちょっかいをかけてこなかったり、突然国史の復習試験が来週に回ったり、父さんが居たり、母さんが怒ったり……。他にももっとたくさん思い当たることがあった。

「ユート、お前はまだ間に合う。案内人を見つけてここから出ろ」

「うん。でも、教えてほしいことがあるんだ。どうして父さんは僕の理想の動きをしなかったの」

理想世界に来てすぐ迎えた朝、父さんになぜ今日は家を出るのが遅いのかと尋ねた。けれど、父さんははっきりとは答えなかった。僕はそのとき近場に出張だったらしいのにと思っていたのに。

「それは、俺がこっちの世界の人間になったからだよ。つまり、俺は理想の世界の住人として登録されてしまったんだ」

「どういうこと」

「向こうの世界に戻るには成人を迎えていないことが条件なんだ。案内人は未成年の前にしか現れないし、こちらから声をかけなければ話しかけてくることもない。だけど、こちらが話しかけるとこうやってこの世界に送られるのさ」

なぜなのか答えを求めようとしたとき、ふとユートの言葉がリピートされた。「答えは人に教

えてもらうものじゃない」これくらいは何とか自分で考えてみようか。

「さあ、ユート。行きなさい。もう時間がない」

時計を確認すると、残りあと五時間を切っていた。案内人がどこにいるか分からない以上、時間は少しも無駄にできない。

「分かったよ。でも、父さんも僕と一緒に行くんだ。きっと何か方法がある。だから、」

「ユート、それはできないんだ。さっきも言っただろ？ 俺はもう……。それに、こっちの俺が居なくなったらこっちのナリシャがまた悲しむことになる。せつかく結婚できたんだ。それが別に理想世界でも俺はいいと思ってる。こっちでも意外と幸せなんだ。お前もいるしな」

父さんの笑顔に陰りはなかった。僕はもうこれ以上一緒に行こうなんて言うことはできなかった。

「じゃあ、一つだけ言わせてよ。僕は向こうの世界では『ユート』じゃなくて『ユト』なんだ」

「そうか。だからか……。お前は運が良かったのかもしれない。あ、そうだ。俺からも一つだけ言わせてくれ。俺はお前に『父さん』なんて言われる資格はないよ」

「そうかな。向こうの母さんは父さんの写真を見せて、これがあなたのお父さんだって言ってたよ」

それを聞いた父さんはすごく嬉しそうだった。それにつられて僕まで嬉しくなった。でも、このままこうやって父さんと話しをしていると帰りたくなくなってしまうから。

「僕もう行くね」

「ああ、さようなら。ユト」

僕は駆け出した。母さんと喧嘩したときみたく、でも今度は別の涙が視界を遮った。

「さよなら、父さん」

案内人のおばさんはいくら探しても見つからなかった。学生証の時計を見ると、刻限はもうそこまで迫っていた。どうしよう。自分の家の周辺は一通り探してみたもののそれらしき人は見当たらなかった。理想世界だからと案内人が来るよう理想を思い描いてもまるで効果がなかった。近くの民家の明かりがまた一つ消えた。「答えは人に教えてもらうものじゃない」そうか！ まだ行っていない場所があった。それは宿のあった町「オクタール」

僕がひたすら走って辿り着いたとき、時刻は二十三時五十分ぴったりにあった。この前のようにおばさんと会った場所へ向かうと、予想通りおばさんはあの日と同じように歩いていた。

「あの、すみません。この辺に宿はないですか？ できれば安いとこだと良いのですが、」

ニヤリと笑って言ってみせた。

「ああ、安いかどうかは分からないけれど、町の端っこに一軒だけ宿があったはずよ。案内してあげようか？」

おばさんはその言葉に再び甘えた僕につまらなそうな表情を向けていた。

二十三時五十七分。僕はとうとう眠りについた。窓から差し込む月の光が首から提げたリングを煌めかせていた。

別れ際、父さんは思い出したように何かを僕に渡した。

「これ、ナリシャに渡してくれないか？」

僕はそれを受け取って、手のひらを確認してみると、何の変哲もないネックレスにリングが通してあった。

「これ、彼女に渡すはずのものだったんだ。もう何十年も経ってしまったけれど……」

「大丈夫、きっと母さん喜ぶよ」

受け取ったネックレスを首に提げた。父さんと母さんのためにも絶対に届けたい。けれど、聞こえてしまったんだ。父さんの呟く声。

「向こうに届くはずないのにな」

僕はリングをぎゅっと握りしめた。

ゆっくりと目を覚ますと、僕はボロボロのベッドの上に寝ていた。太陽の光は窓にかかる無数のつたで遮られている。さらに、床も壁も何もかもが埃にまみれており、カビ臭いにおいが立ち込めていた。来たときから一変した光景に驚き、急いで部屋を出た。そのままあの宿とは似ても似つかない建物を抜け出し、急いで家を目指した。何も変化のないオクタールの町の中で、宿だけが廃れていた。

太陽の位置はほぼ真上に近付いていた。流石に疲れも限界に達している。走ることを止めたせいか、この間よりはるかに長い距離を歩いているような気さえた。そういえば、昨日の夜から何も食べていなかった。空腹を意識した途端、一気に歩く活力がそがれた。もう自分の家のある町まではすぐそこなのに……。

「……トー！ ユトー！」

ついに空耳まで聞こえるようになってしまった。もしかしたらこのままもう……。ここは現実だ。

「ユトなのね！ 全く、心配したんだから。どこ行ってたのよ」

そう、ここはもう現実。

「ちょっとユト！ 聞ってるの？ こんなところで倒れたら困るのよ。しっかりなさい」

「イレーヌ？」

「そうよ。昨日からいなくなったって聞いて本当に探したんだから」

「良かった。イレーヌがいつも通りで」

彼女は怪訝そうな顔で僕を見ていた。それでも構わなかった。

イレーヌに付き添われて家に向かっている途中、これまた僕を探してくれていたフレンの助けもあり、なんとか家まで辿り着くことができた。おまけに、二人から多大な説教を受けてしまった。それがどうにも嬉しくて、僕は笑う。イレーヌもフレンも全然思い通りには動いてくれ

なかった。

「あ、そうだ。ユト、早くお母さんに会ってやれ」

そこで思い出されたあの日の喧嘩のせいで僕の足は止まってしまった。

「何やってんだ。早く行ってやれよ」

フレンの後押しにも尻込みしているこの状況を見て、立ち上がったのはイレーヌだった。

「ねえ、ユト。行ってあげてよ。あなたの家族は今、お母さんだけなんじゃなかったの？」

「……そうだね」

僕は頷くこともなく、静かに帰宅した。

無言のまま母さんがいるであろうリビングに向かうと、その奥のキッチンから何やら物音が聞こえてきた。夕食の支度にしては随分と早い時間だ。それに料理中という状況のせいで余計に声をかけにくい。さて、どうしようか。

「あ、あの。母さん、ただいま」

聞こえるか聞こえないかといった声だった。

「ユト！ どこ行ってたのよ、バカ。母さん心配したのよ。本当に、本当に……！」

「ごめん……」

母さんは僕を叱って、そして抱きしめた。なんだ、ちゃんと怒れるじゃん。

それから僕はどこに行っていたのかを話した。けれど、理想世界については話さなかった。言ってもよく分からないだろうし、僕自身、それが夢なのか現実なのかよく把握できていなかったのだ。だけど、これだけはしっかりと僕の首に提がっていた。

「そういえば、これ」

ネックレスを外して母さんの目の前にかざした。金色のリングの内側にはしっかりと『ナリシャ』の文字が刻まれていた。

「どうしてこれをユトが持っているの？ これは母さんが昔欲しかった……」

「え？ そうなの？」

僕は嘘をついた。でも、母さんはきっと分かっているはずだ。

「ありがとう」

リングを握りしめて、母さんは泣き崩れた。父さんの思いは無事届きました。

今日の夜は誕生日パーティーをするらしい。帰って来たときに母さんが料理していたのはそのためだったようだ。後にイレーヌとフレンも合流するって言ってたっけ。

空は茜色に染まり始めていた。まだ、気持ちが落ち着かない。向こうの世界の方が良かったのかなと、ふとしたときに思い返してしまう。向こうのフレンは大人しかっし、イレーヌはものすごく素直で可愛かったし、何より母さんと父さんが家族らしかった。それに天気や予定だって思い通りになった。だけどその代わり、つまらない。予想外なことは何一つ起こらず、全部予定調和の中で物事が進んでいく。だとしたらやっぱりこっちの世界の方が新鮮で奇想天外で、毎日面白い。人の意思は思い通りになるべきものじゃないと思うから。

「ユトー。ちょっと手伝ってくれるー？」

キッチンの方から母さんの声がした。僕はすぐさま返事をしてそこへ向かった。

「ねえ、そういえばあなたの名前生まれる前は違かったの知ってる？」

「何それ。僕知らないんだけど」

完成した料理を運びながら言った。

「本当はね、あなたのお父さんと『ユート』って名前にしようって話してたの。でも、生まれる前に父さんはいなくなってしまった。あなたが生まれた当時、母さんは何が何だか分からなくて、『ユト』って書いてしまったのよ。ホントに馬鹿でしょ？」

「母さん。ありがとう。ありがとう」

涙がこぼれた。母さんは驚いて僕の顔を覗き込んだ。僕は、ちゃんと戻って来られたんだ。

パーティー会場である自宅は賑わっていた。たった二人のゲストが来ただけなのに。手作りのケーキも真ん中に置かれ、早くもろうそくに火を灯す作業が行われている。

「はい。じゃあ、フレン電気消してー」

イレーヌの指示で電気は消され、部屋の中でろうそくの火が優しく揺らめいていた。主役の僕はテーブルの真ん中に移動し、イレーヌに合図の後に火を消すよう耳打ちされた。

「じゃあ、みんないくよー！　せーのっ！」

「誕生日おめでとう、ユト！」

一発で消そうと思ったけど、そう上手くはいかなかった。一本だけ残ったろうそくがみんなの顔を照らしていた。たぶん僕もみんなと同じ顔をしているんだろうな。

「みんなありがとう」

僕はそう言って、最後の一本を消した。

Doesn't go the way we want it to.

<http://p.booklog.jp/book/64735>

著者 : sleepingnap

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/sleepingnap/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/64735>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/64735>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ